

助詞「は」の上位意味項目の再検討 —名詞句＋「は」に着目して—

井原 彩樺（同志社大学文化情報学部）

山内 信幸（同志社大学文化情報学部）

Reconsidering the Higher Meaning Item of Particle “Wa”: Focusing on Noun Phrases + “Wa”

Ayaka Ihara (Faculty of Culture and Information Science, Doshisha University)

Nobuyuki Yamauchi (Faculty of Culture and Information Science, Doshisha University)

要旨

本稿では、助詞「は」の上位意味項目の検討を行う。従来から、助詞「は」の意味項目については、様々な説（菊地 1995、寺村 1991、尾上 1981、北原 1981、益岡 1991、野田 1996 など）が提唱され、現在も、とりわけ、「強調（取り立て）」と「主題」、「対比」の意味項目の取り扱いに関して、曖昧性が残されたままである。そこで、本稿では、助詞「は」の意味項目に関する従来の説の問題点を指摘・整理し、助詞「は」の意味上位項目の策定に向けて、語用論と認知言語学の知見に基づいて、「強調」の意味の生起条件に関する新提案を行う。具体的には、助詞「は」の前に名詞句が接続する「名詞句＋『は』」という形式に限定して、基本的に、「元に想定する形」が存在し、それが助詞「は」を用いた別の形に変化することで、関連性理論における「認知効果」の程度が上昇し、「強調」の意味が生じるという仮説のもと、助詞「は」の上位意味項目の検討を行う。

1. はじめに

本稿では、助詞「は」のより多くの用例を内包する意味項目、いわゆる、上位意味項目の再検討を行うことを目的とする。助詞「は」の意味項目に関する議論は、長きに亘って行われており、様々な説（菊地 1995、寺村 1991、尾上 1981、北原 1981、益岡 1991、野田 1996、など）が提唱されている。助詞「は」の上位意味項目については、現在も、「強調（取り立て）」と「主題」、「対比」の意味項目の取り扱いに関して、曖昧性が残されたままである。

そこで、本稿では、前述の3つの意味のうち、「強調」に着目し、その意味の生起条件を認知言語学や語用論の関連性理論の知見に基づき整理し、その生起条件として、「名詞句＋『は』」の形式のうち、先行研究で「主題」の意味を持つとされた用例が包含されるのかを検証し、助詞「は」の用例を最も多く内包する意味項目として、「強調」が妥当であるかを検討する。なお、本稿で検討する上位意味項目は、現時点では、「名詞句＋『は』」の形のものであるが、今後、他の品詞（句）が前に接続する「は」も検討予定のため、それを想定した提案を行う。前に接続する品詞（句）ごとに調査を分ける理由は、後述のコーパス分析の結果から、前に接続する品詞ごとに助詞「は」の意味傾向が分かれることが明らかとなっているためである。

また、先行研究の議論を整理すると、「主題」が「強調」の意味に内包されているかについては、北原（1981）が、「主題」は、不特定多数から主題として選択されているため、「取り立て」に内包されると主張しているが、これを「強調」の定義としてしまうと、「強調」の意味を本来生起させないような、類義語からの語選択においても、「強調」の定義を満た

していることになり、「強調」の定義の余剰性が指摘できる。

一方で、「対比」が、「強調」に内包されるかどうかについては、「対比」は片方の対象を肯定して、もう片方の対象を否定したり、共通点の多いものの、ごくわずかな差異の発生を目立たせ、整理したりする際に用いるため、その包含関係は明白である。

そこで、本稿では、「対比」は「強調」を含むことが自明であるので、直接の議論の対象とはせず、「主題」が「強調」の生起条件に該当するかについて、用例を用いて検証し、上位意味項目としての最適解を明らかにする。現時点で仮定する意味構造は、図1に示される。

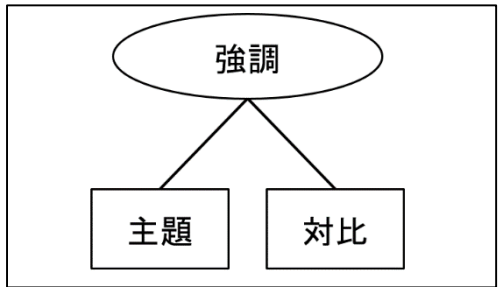


図1 名詞句+「は」の形式における意味構造の仮定

2. 先行研究と研究課題

2.1 助詞「は」と前接続の品詞（句）の関係

本節では、本稿で、「名詞句+『は』」の形式のものに限定して、助詞「は」の上位意味項目としての最適解の検討を行う理由を説明する。前に接続する品詞（句）ごとのコーパス分析の結果、前に接続する品詞ごとに助詞「は」の意味傾向が分かれることが明らかとなっていることが挙げられる（分類基準は、井原（2026）で扱った中学国語文法における意味分類基準に依った。）。使用したコーパスは、「現代書き言葉均衡コーパス」のコアデータのうち、「出版・新聞」、「出版・雑誌」、「出版・書籍」、「特定目的・白書」である。前方共起の品詞（中分類）ごとに、語彙素が「は」のものを50件ずつ抽出し、それらを対象として、井原（2026）で設定した中学国語文法における助詞「は」の意味分類基準を用いて、意味分類を行った。検出できた品詞は、助詞・助動詞を除いて、助詞「は」に前接続していることが確認できた以下の品詞である。

名詞（普通名詞・固有名詞・数詞）、代名詞、形状詞（一般）、副詞、接続詞、動詞（一般・非自立可能）、接尾辞（名詞的・形状詞的）

表1 品詞ごとの意味分類の分布（割合）のヒートマップ（※動詞は母数が小さいことを考慮して下位項目の一般・拘束形態素をまとめた。）（単位は%）

	名詞			代名詞	副詞	接続詞	動詞	形容詞	接尾辞	合計
	普通名詞	固有名詞	数詞					一般	名詞的	
主題	54.00	36.73	35.42	87.76	0.00	0.00	0.00	17.24	70.21	38.13
対比	44.00	63.27	54.17	12.24	93.02	100.00	10.00	82.76	29.79	57.07
強調（取り立て）	2.00	0.00	10.42	0.00	6.98	0.00	90.00	0.00	0.00	4.80
合計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

表1から、前に接続する品詞ごとに、意味傾向が見られることがわかる。「主題」の意味となるものは、名詞・代名詞・形容詞・接尾辞であり、これらはすべて名詞句である。この形容詞の用例は「詳しく」のみで、「詳しいことは」と同義で用いられる「詳しくは」の用

例のみであった。この分析結果から、学校文法から切り離れた文法は、中学国語文法とは異なるものの、学校文法から切り離れた文法にも同様の傾向があると想定し、前に接続する品詞（句）ごとに調査を分けることとした。

2.2 先行研究

野田（1996）では、自身の研究を含んで、以下の6つの説が、従来の議論として、整理されている。

- (1)対比派生説：主題の用法を基本とし、対比の用法を派生とする。（菊地 1995）
- (2)主題派生説：対比の用法を基本とし、主題の用法を派生とする。（寺村 1991）
- (3)構造本質説：「二分結合」など、構造的な面を本質とする。（尾上 1981）
- (4)意味本質説：「取り立て」など、意味的な面を本質とする。（北原 1981）
- (5)プロトタイプ説：典型的な主題と典型的な対比が連続するものとする。（益岡 1991）
- (6)複合説：本質説とプロトタイプ説を複合したものとする。（野田 1996）

まず、対比派生説は、「主題」の用法を基本とし、「対比」の用法を派生とするものである。一般の「は」構文（「名詞句＋『は』」で始まる文、かつ、「XはYだ」を除く）において、「Xは〈述部〉」という文は、「Xについての情報を述べると（＝Xはどうか/どうであるかという）、〈述部〉」という述べ方を「情報構造」が反映される文である。これは「主題」の用法を念頭に置いているが、「対比」の場合も同様で、その情報が対照的な場合がこれにあたる。

主題派生説は、文中のある要素を際立たせ、対比効果を生起させる働きを基本とし、それがあある条件下で、対比の相手の存在が意識されず、そこに聞き手の注意を特に惹きつけて、後の陳述と結びつけるだけの場合を「主題」を表すものとしている。

構造本質説は、「は」の前後を前項と後項の2つに分け、その2つが、結合している構造であるとした「二分結合」という構造的な面を本質とするものである。もともと述語と従属関係であった語を述語から取り出して前項とすることで、従属関係から対等関係に変化しているとされている。また、「は」を用いることで、各判断を対比しつつ、特に、「譲歩」に近い気持ち加わるとされている。

意味本質説は、「取り立て」など、意味的な面を本質とするものである。北原（1981）によると、助詞「は」には「主題」と「対比」の意味があるが、この2つは「取り立て」の意味を持つことで共通しているとされている。「主題」は不特定多数からの「取り立て」であり、「対比」は対比されるべき特定有限数の中からの「取り立て」であると、「主題」と「対比」の意味項目の名称の意味から考察している。

プロトタイプ説は、一方に典型的な「主題」が、もう一方に典型的な「対比」があり、そのあいだに中間的な用法があるとするものである。「取り立て」を「ある命題を範列的に対立する他の命題を背景として取り立てること」として、主題に関する議論では、「主題」と「対比（取り立て）」の意味項目を用いて整理している。

また、野田（1996）自身は、本質説（原文ママ。意味本質説か構造本質説かの明記なし。）とプロトタイプ説を踏まえた複合説を提唱しており、「は」の前と後ろを2つに分ける構造的な特徴と対比的な意味を付け加えるという意味的な特徴があるとしている。この構造的

な特徴が優位になるときは、「主題」の意味になり、もう一方の意味的な特徴が優位になるときは、「対比」の意味になるとしている。

以上のことをまとめると、「主題」の意味が基本とされている説は、対比派生説（菊地 1995）であり、「強調（取り立て）」の意味が基本とされている説は、主題派生説（寺村 1991）・意味本質説（北原 1981）・構造本質説（「排他」と称している。）（尾上 1981）である。「主題」と「対比」の意味が基本とされている説は、プロトタイプ説（「対比」を「対比（取り立て）」としている。）（益岡 1991）と複合説（野田 1996）である。

つまり、先行研究で主張されている助詞「は」の中心的意味は、「主題」か「強調（取り立て）」、もしくは、その両方であるという観点に集約できる。

2.3 辞書における助詞「は」の意味項目

辞書における助詞「は」の意味項目に関して、『三省堂 現代新国語辞典 第二版』、『明鏡国語辞典 第二版』、『新選国語辞典 第七版』、『講談社 国語辞典 第二版』、『学研 現代新国語辞典 第四版』、『旺文社 国語辞典 第九版』、『大辞林 第三版』、『集英社 国語辞典 第二版』の 8 冊を取り上げる。これら辞書の助詞「は」の項をそれぞれ抽出し、項目ごとに意味の記載内容を比較し、その結果を表 2 にまとめる。

表 2 各辞書における「は」の意味項目の比較（行が辞書名、列がページ数、品詞名、意味項目：記載がある項目には○。ない項目は空欄）

辞書名	p	品詞名	①	①-1	①-2	①-3	②	②-1	②-2	③	④	④-1	④-2	⑤	⑤-1	⑤-2	⑤-3	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
集英社 国語辞典 第二版	1394	係助詞	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
三省堂 現代新国語辞典 第二版	979	副助詞	○				○	○		○	○			○		○		○	○	○		
学研 現代新国語辞典 第四版	1113	係助詞	○				○	○														
講談社 国語辞典 第二版	936	副助詞	○							○	○								○			
旺文社 国語辞典 第九版	1063	係助詞	○			○	○				○								○			
明鏡国語辞典 第二版	1370	副助詞	○				○											○		○	○	
新選国語辞典 第七版	914	係助詞	○				○				○											
大辞林 第三版	1992	係助詞	○				○	○		○	○											○

意味項目に関して記載数が最も多かったのは、『集英社 国語辞典 第二版』であった。前述の 8 冊の辞書を統合した意味項目は、以下の通りである。

「①主題・題目」、「②対照・対比」、「③条件提示」、「④強調・取り立て」、「⑤部分的な肯定・否定」、「⑥そのことだけは確かだという気持ちを表す」、「⑦繰り返し」、「⑧広い地域の中の一定の地域を示すとき、（時間にも使用する）」、「⑨『A は A で/A は A として』の時、本筋とは離れるが立場や事象を考慮していう」、「⑩否定の意味を伴って譲歩の気持ちを表す」

これらの 10 項目には、以下の通り、①に 3 項目、②に 2 項目、④に 1 項目、⑤に 3 項目の下位分類が存在することが確認できる。

「①-1 個別具体の主題」、「①-2 一般抽象の主題」、「①-3 他との区別を行う、判断の主題」、「②-1 対比的な提示」、「②-2 類同するものの対比的な提示」、「④-1 前接の語の意味を強める」、「④-2 数量の語について肯定の時は最小限を否定の時は最大限を表す」、「⑤-1 下に逆接が続き、『は』に前接続するものだけを肯定する」、「⑤-2 下に否定表現が伴い、前に接続するものだけを否定する」、「⑤-3 動詞述語に『しない』形容詞述語に『ない』を伴って主題の範囲内のみ否定」

このように、辞書における助詞「は」の意味項目では、8冊すべての辞書に「主題・題目」の意味項目に関する記載があり、次に記載数が多い意味項目として、「対照・対比」（記載数：7）が挙げられ、そのあとに、「強調・取り立て」（記載数：6）が続く。このことから、助詞「は」の最も基本的な意味は、「主題」であると考察できる。

2.4 先行研究の課題

まず、「主題」を助詞「は」の上位意味項目とする説については、助詞「は」の前に接続する品詞（句）が、名詞句（形容詞の名詞化（「詳しく」）を含む）の時のみ成立する。「主題」の意味項目自体は、辞書の記載内容からも明らかであるように、助詞「は」の中心的な意味であることが指摘できるが、コーパス分析の結果（表1）からわかるように、前に接続する品詞（句）が名詞句以外するとき、助詞「は」の意味項目は、「主題」にはならない。つまり、「主題」は、名詞句以外が前接続する助詞「は」の用例を内包しない。「主題」を中心とする意味項目を提唱した菊地（1995）も、「名詞句+『は』」の形に限定して、これを主張している。助詞「は」の上位意味項目を検討するとき、前に接続する品詞（句）に限定される意味項目は上位意味項目とはいえないため、「主題」の意味項目のみが最上位意味項目にはならないことが導ける。

その一方で、「対比」は、「強調」に内包されることが明白である。というのも、「対比」は、片方の対象を肯定して、もう片方の対象を否定したり、共通点の多いものの、ごくわずかな差異の発生を目立たせ、整理したりする際に用いるためである。最も顕著にこの「対比」の特徴を表す助詞「は」の用例は、論述文における逆接の接続詞・接続助詞の使用を伴う用例（「AはBであるが、CはDである。」）である。先行研究の著者らは、自身の主張をより強化・補強するために、相対するものの特徴（多くはそれがその論説文の目的に沿わないもの）を先に挙げ、次に、逆接の接続詞・接続助詞を挙げて、後に前述の内容に対応する自身の主張の特徴を述べている。このように、対比関係を用いることで、情報の優先順位を明示的に聞き手に提示することができる。これらのことから、前に接続する品詞（句）にとられない助詞「は」の上位意味項目は、「『主題』・『強調』」もしくは、「強調」だと考えられる。

また、論文ごとに、「強調（取り立て、排他）」の定義が異なり、「対比」と同様の意味として扱う論文もあれば、ほとんど議論の対象とされない論文も見受けられる。例えば、益岡（1991:174）では、「強調（取り立て）」を「ある命題を範列的に対立する他の命題を背景にして取り立てること」とし、「対比（取り立て）」という表記も見られる。また、北原（1981:265）では、「強調（取り立て）」を「叙述の中のある部分（取り立てられる部分）を特に問題とすること。」としている。ここでの「ある部分」とは、助詞「は」を含む文節のことである。また、尾上（1981:103）では、「強調（排他）」を「二項の結合そのものの—すなわち、句全体の—他からの特立である」としている。さらに、寺村（1991）では、「主題」と「対

比」の意味判別や「強調（取り立て）」の意味を持つ取り立て助詞を用いるかどうかなどの判断は、最終的には、「談話法的条件」によるとしている。ただ、この談話法的条件については、寺村（1991）では、詳しく述べられてはいない。実際、助詞「は」の意味判別には、文構造や文中での役割といった特徴から意味判別をすることもできるが、談話法的条件に依るものもある。つまり、助詞「は」の意味を一般化するとき、談話法的条件にも着目する必要があるが、寺村（1991）では、その点には触れず、助詞「は」が用いられている文の構造から意味を収束している。このように、先行研究では、「強調」の定義に揺れが見られ、生起条件の提示ができていないものも見受けられる。

そこで、本稿では、具体的な助詞「は」の談話法的条件（以下、談話における生起条件）を明らかにするために、まず、「強調」の意味の生起条件について、談話上で発生するものという前提を踏まえて、定義し、その条件に「主題」の用例が当てはまるのか、そして、特に、従来の談話をほとんど考慮しない構造的なアプローチでのみでは説明できなかった助詞「は」の用例（特に、「主題」の意味となるもの）が当てはまるのかを検証し、助詞「は」の上位意味項目を検討する。

2.5 研究課題

以上の先行研究とその課題を踏まえ、本稿での研究課題は、以下の3点を設定する。

RQ1：強調の生起条件は、どのようなものか。

RQ2：助詞「は」のどの用例が、強調の生起条件に該当しているのか。

RQ3：助詞「は」の意味上位項目は、どのように設定できるか。（「主題、強調」か「強調」か。）

これら3点の研究課題について、以下の節で順に検討する。

3. 本稿の理論的立場

3.1 理論的立場

本稿では、関連性理論（ことばと意味の研究会 2018）と認知言語学（ラネカー 2011）・（山梨 2004）の知見を援用し、「強調」の生起条件を検討する。まず、関連性理論とは、松井（2003）によると、発話の言語的意味は、話し手の意図した解釈を得るための手掛かりにしか過ぎず、聞き手はその手掛かりを基に、推論を用いて解釈を構築するということを前提とした理論である。ここでの解釈は、最小で最も呼び出しやすい文脈で解釈されるとしている。本稿では、「認知効果」を中心に扱うこととする。さらに、認知言語学については、山梨（2004）に基づいて、焦点連鎖に関する知見を参考にする。

3.2 発話と発話内容の理解の過程の定義

ここでは、関連性理論（ことばと意味の研究会 2018）、認知言語学（ラネカー 2011）・（山梨 2004）に基づき、発話と発話内容の理解の過程を以下のように定義する。

まず、本稿での「発話」とは、基本単位を1文とする。また、前提として、効率的な情報伝達、つまり、関連性の担保を目指すことが挙げられる。基本的には、聞き手は、話し手の次の発話や発話総体の結論を常に推測しながら、より効率的な理解を図ろうとしていると仮定する。

発話と発話内容の理解の過程について述べる。聞き手は、前回の話し手の発話（発話_{n-1}）と前回の推論 H_{n-2}を照応する照応 H_{n-1}と、H_{n-1}①「文脈や、一般通念、話し手と聞き手が共有している知識などが含まれた現状の共有スペースの内容は何か」と H_{n-1}②「話し手は何を伝えようとしているのか（発話_n以降の予測）」を想定する推論 H_{n-1}を行う。そして、話し

手は、目標 S_{n-1} 「聞き手にどのように理解させたいのか」を前提にしながら、 S_{n-1} ①「共有スペースの内容は何か」と S_{n-1} ②「推論 H_{n-1} ②は何か」ということを推論する推論 S_{n-1} を行い、これを踏まえて、また、新たな発話 n を行う。そして、聞き手は先ほどの推論（推論 H_{n-1} ）をこの新たな発話（発話 n ）で照応（照応 n ）し、前述と同じプロセスを繰り返す。これを図解したものが図2である。なお、ここでの n は、発話の回数を指す。

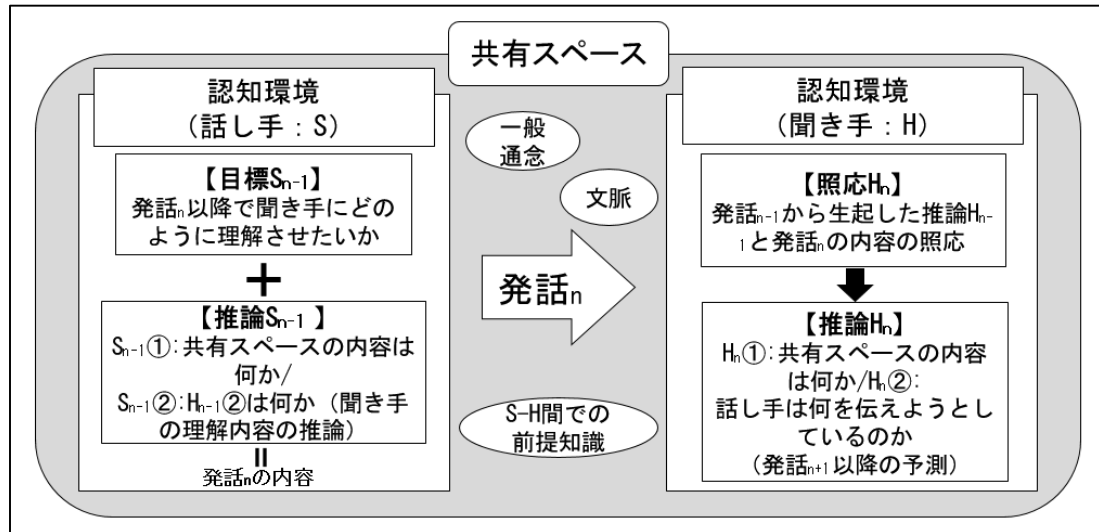


図2 発話と発話内容の理解の過程の構図

話し手が話し始めてから話し終わるまでの連続した発話のまとまりを「発話総体」と呼び、これが相互的に繰り返されているものが「会話」とする。ただ、本稿では、2人が相互的に話し手と聞き手を交代し合う場合、複雑となることが予想されるため、話し手と聞き手が一方である「語り」のみを想定する。つまり、発話 n と発話 $n+1$ などの連続する発話は、同じ話し手からのものと想定する。

4. 「強調」の生起条件と定義

本節では、「強調」の生起条件と定義を扱う。本稿では、「強調」が談話上で発生することと、その際、聞き手は推論 H_n において、常に効率的な情報伝達（取得）を目指すこと、つまり、関連性の担保を考慮した推論 H_n を行っていることを前提とする。

4.1 「強調」の基本的な生起条件

まず、「強調」の生起条件は、推論 H_{n-1} ②と発話 n に言語表現上の「差異」が発生することと想定する。ただし、この「差異」が発生するとき、必ずしも「強調」の意味が付与されるというわけではない。というのも、新情報が追加されるときも、推論 H_{n-1} ②と発話 n 間に、常に差異が発生するからである。また、「強調」そのものの意味定義に着目したとき、「強調」は同じ情報量の別の表現もあるが、その表現よりも意味を強めるものであり、新情報の有無は関係しない。つまり、「強調あり⇒大きな差異あり」は十分条件の関係にある。「強調」の生起条件には、大きく分けて、以下の3種類がある。

- (1) 推論 H_{n-1} の H_{n-1} ②も、推論 S_{n-1} の S_{n-1} ②にも、談話の流れ上の問題はないなかで、推論 H_{n-1} と発話 n に差異が発生する場合。
- (2) 推論 H_{n-1} の H_{n-1} ②が誤っていて、推論 S_{n-1} の S_{n-1} ②と齟齬が生まれ、それが反映された発話 n で、推論 H_n と発話 n に差異が発生する場合。
- (3) 推論 H_{n-1} の H_{n-1} ②は合っているが、推論 S_{n-1} の S_{n-1} ②が誤っていて、推論 H_n と発話 n

に差異の発生が生じたり、推論 H_{n-1} や共有スペースにある情報と発話 n に情報の重複が生じたりする場合。

ただし、「強調」には、意図的に「強調」が生じる場合と無意図的に「強調」が生じる場合がある。上記の3種類の「強調」の生起条件のうち、(1)は、話し手が意図的に「強調」を引き起こすことができる場合である。(2)と(3)は、話し手が意図的に「強調」を引き起こすことができず、「強調」を導く表現に関連せずとも、「強調」が発生する場合である。(2)は、話し手が意図的に「強調」を引き起こそうとしても、しなくても、いわゆる、勘違いのような「強調」が生起してしまう場合である。(3)は、話し手が意図的に「強調」を引き起こそうとしていなくても、強調が生起してしまう場合である。(ある項目を「強調」しようとしていたとしても、目的通りの「強調」は発生しない。)

本稿では、次節以降で、助詞「は」を「強調」を導く表現とし、これを含んだ発話によって発生する「強調」にのみ着目するため、(1)のみを取り扱う。なお、助詞「は」に関連せずとも「強調」が発生する(談話上のエラーが原因で発生する)(2)・(3)については、推論の誤りで生じる事例であるため、次節以降で扱わないこととする。

また、推論 H_{n-1} の内容が発話 n によって変化するという認知環境への影響は、関連性理論の「認知効果」と関連があるといえる。「認知効果」とは、聞き手に存在する想定(聞き手の頭の中にある考え)、つまり、「認知環境」に発生する以下の3つの効果のことである。

- I 文脈含意が加えられる。(新たに何かわかること。)
- II 想定強化が生じる。(既存の認知環境での想定強化。正しさの確認。)
- III 想定破棄が生じる。(既存の認知環境での想定削除。)

上記の3つの認知効果のなかでも、IIIの程度が高まる状況が、「強調」に関連すると考える。IIIは、前述の「強調」の生起条件である「差異の発生」に関連する。「差異」には、文脈上の差異と言語表現上の差異があるが、本稿で「強調」の生起条件として用いる「差異」は、言語表現上に顕現する差異を対象とする。というのも、聞き手が推論する発話は、関連性を担保しているという前提の下、一般的な表現(「強調」を含意しない表現)であると仮定することができる。いいかえれば、推論上で「強調」を想定しないからこそ、照応したときに、「差異」を認識し、「強調」が成立すると仮定する。この仮定が成立するとしたとき、「強調」が生起する場合、すべての用例に推論 H_{n-1} の H_{n-1} ②、つまり、「元に想定する形」(前述の「一般的な表現」)が存在することになる。5節以降では、名詞句+「は」の形式の用例に、「元に想定する形」が存在するかどうかを検証し、この存在の有無を、助詞「は」が「強調」の意味を含意するかどうかの判断基準とする。

本稿では、3つの認知効果のうち、Iは、新情報に関する認知効果であり、「強調」の範疇にはないため、考察の対象外とする。また、IIは、「主題」の生起条件になりうるもので、「主題」は、「強調」の意味を担保したうえで、推論 H_{n-1} と発話 n において、滞りなく談話が流れる状況で、言語内容の想定強化が起きる場合を指すため、考察の対象外とする。一方で、IIIは、推論 H_{n-1} ②、つまり、「元に想定する形」と発話 n における言語表現上の差異が発生している場合で、「元に想定する形」と「は」を用いた表現では、ある要素の情報の重要度が「元に想定する形」より「は」を用いた表現の時に相対的に上昇し、この「差異」が新情報のような文意を大きく変化させるものでない場合、「強調」の生起条件を満たしているため、本稿での考察の対象となりうると考える。

4.2 「強調」の生起過程と焦点推移

「元に想定する形」から、「強調」の意味を含める形に変化するとしたとき、「強調」の発

生の有無を判断する基準として、認知言語学の「焦点連鎖」の考え方を援用する。

まず、山梨（2004）によると、「焦点連鎖」の仕組みとして、主語は、述語がプロファイルする関係によって位置づけられる存在のうち、1 次的な焦点として認知される対象であり、このような対象は、トラジェクター（tr=trajector）として規定される。一方で、目的語は、述語がプロファイルする関係によって位置づけられる存在のうち、際立ちがより低いもので、ランドマーク（lm=landmark）として規定される。

つまり、認知言語学のアプローチでは、主語、直接目的語、間接目的語の文法関係は、相対的な際立ち（「相対的な際立ち」は、「強調」と混同されやすいため、以下では、「相対的な情報の重要度」とし、同様の理由で、「際立ち」は、「重要度」と読み替える。）によって、情報の重要度は、図 3 のように規定される。

〈1 次的焦点〉	〈2 次的焦点〉	〈3 次的焦点〉	...
NP _S	> NP _{DO}	> NP _{IO}	...
(tr)	(lm ₁)	(lm ₂)	...

図 3 焦点連鎖の認知プロセス（山梨 2004: 20）（DO＝直接目的語、IO＝間接目的語）

図 3 の相対的な重要度を修飾関係において考えると、図 4 が得られる。山梨（2004）では、修飾部は、補部である主語や目的語よりも、情報の重要度は相対的に低いとされている。

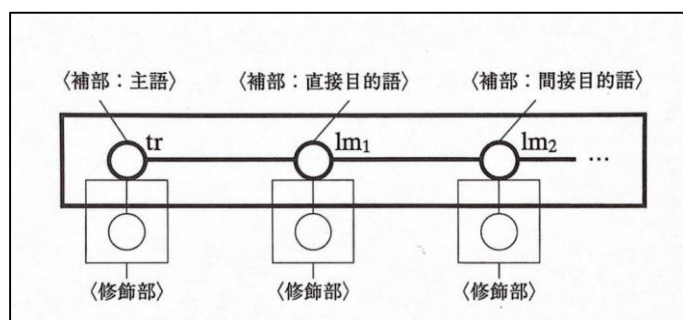


図 4 補部と修飾部の関係（山梨 2004: 117）

図 3 と図 4 の関係を踏まえて「強調」の生起基準を整理すると、「元に想定する形」では、情報の重要度が相対的に低いとされる文要素であったが、「強調」を導く表現を含む発話では、その表現によって、強調させたい要素の文における情報の相対的な重要度が「元に想定する形」より上昇していれば、「強調」の意味が生起していると見なすこととする。また、文における情報の相対的な重要度が、「元に想定する形」と「強調」を導く表現で変化することを「焦点推移」と呼ぶ。

また、ラネカー（2011）によると、トラジェクターとして選択されるのは、主として、動作主か主題のどちらか一方とされているため、「元に想定する形」があり、その形ではトラジェクターでなかった要素が、主題化しているものは、主題化された要素の情報の重要度が「元に想定する形」より相対的に上昇しているといえ、これによって、「強調」の意味が生起していると見なすこととする。

ただし、「元に想定する形」で、トラジェクターである要素が、「強調」を導く表現を含む発話でも変わらず、トラジェクターとして選択される場合、従来の認知言語学のアプローチでは、相対的な重要度が上昇しているとはいえず、「強調」の生起条件である「差異の発生」

が認められないことになる。しかしながら、後述するように、助詞「は」の用例では、これに該当するものがある。つまり、認知言語学の焦点連鎖についての知見だけでは、助詞「は」の上位意味項目が「強調」であることが説明できないため、主に、「焦点推移」の考え方を援用しながらも、一部修正を加えた以下の「強調」の生起基準を表3のように設定する。

表3 「強調」の生起基準のスキーム

		元に想定する形（推論 _{n-1} ②）	強調を導く表現を含む（発話 _n ）
強調の程度	[a]	付加部	トラジェクター
	[b]	修飾句	トラジェクター
	[c]	補部（トラジェクターを除く）	トラジェクター
	[d]	修飾句	補部（トラジェクターを除く）
	[e]	トラジェクター	トラジェクター
	[f]	補部（トラジェクターを除く）	補部（トラジェクターを除く）

認知言語学における文法的アプローチを基に検討すると、相対的な情報の重要度について、文役割を基準に規定しており、これを活用することで、「元に想定する形」と「強調」を導く表現を含む発話間で、ある要素が焦点推移し、情報の重要度が上昇し、「強調」が発生しているといえる。ただし、認知言語学におけるアプローチでは、表3の[e]と[f]のような場合において、焦点推移が起きていないため、「強調」の意味は生起しないとされるが、文役割に変化がなくても、別の表現をあえて用いることで、「元に想定する形」と「強調」を導く表現を含む発話間に「差異」が発生し、想定破棄が発生が生じる。そのため、焦点推移が明示的に生じる[a]、[b]、[c]、[d]と比べて、相対的な「強調」の程度は低くなるものの、「強調」は発生していると思えることができる。

5. 助詞「は」の「強調」の種類と用例

本稿で扱う助詞「は」の「強調」の種類については、全体とすると、「焦点推移型」と「非焦点化推移型」に大別され、詳細は、以下のとおりである。

1. 焦点推移型
 - 1-1. 付加部の主題化型
 - 1-2. 修飾句（格成分の連体修飾語）の主題化型
 - 1-3. 修飾句（述語名詞の連体修飾語）の主題化型
 - 1-4. 被修飾語の主題化型
 - 1-5. 補部（直接目的語）の主題化型
2. 非焦点推移型
 - 2-1. 補部（主語）の主題化型
 - 2-2. 程度の増減型

5.1 焦点推移型

5.1.1 付加部の主題化型：「1964年には東京でオリンピックが開かれていた。」

本項では、益岡（1991）がプロトタイプ主題としては解決できないとしたうえに、尾上（1981）の構造本質説でも解決できていない、付加部の主題化型の例文について、本稿で提

唱する助詞「は」の「強調」の定義にどのように該当するかを「1964年には東京でオリンピックが開かれていた。」の例文を用いて述べる。

この例文の「元に想定する形」は、「1964年に東京でオリンピックが開かれていた。」である。この例文が成立するとき、付加部である時の格成分が主題化しているといえる。主題化の前後で、述部に関する「時」を表すということは、変化していない。しかしながら、述部との関連性が低い、付加部の時の格成分が、トラジェクターである「主題」となる。そのため、時の成分が「強調」の生起条件を満たしているといえる。この型は前節で述べた、『強調』の生起基準のスキーム」のうち、[a]に該当する。

5.1.2 格成分の連体修飾語の主題化型：「象は鼻が長い。」

本節では、格成分の連体修飾語の主題化型の例文について、本稿で提唱する助詞「は」の「強調」の定義にどのように該当するかを「象は鼻が長い。」の例文を用いて述べる。

この例文は、三上（1969）は、「は」が連体修飾の「の」を代行するとしているが、これに倣うと、元の強調されていない文は、「象の鼻が長い。」である。もともと連体修飾語であった「象」に「は」が付くことで、「鼻」との従属関係が解消され、主題化されるため、「象」と「鼻が長い」という特徴が並列になる。「元に想定する形」では、格成分の連体修飾語であり、相対的な情報の重要度が低かったが、「は」を用いた表現では、「主題」となり、トラジェクターとなったため、主題化された要素の情報の重要度が「元に想定する形」より相対的に上昇することになり、これは「強調」の生起条件を満たしているといえる。この型は前節で述べた、『強調』の生起基準のスキーム」のうち、[b]に該当する。

5.1.3 述語名詞の連体修飾語の主題化型：「かき料理は広島が本場だ。」

本項では、述語名詞の連体修飾語の主題化型の例文について、本稿で提唱する助詞「は」の「強調」の定義にどのように該当するかを「かき料理は広島が本場だ。」という例文を用いて述べる。

この例文の「元に想定する形」は、「広島がかき料理の本場だ。」である。もともと、連体修飾語であった「かき料理」に「は」が付くことで、「本場」との従属関係が解消され、「かき料理」と「広島が本場だ。」が並列関係になる。「元に想定する形」では、述語名詞の連体修飾語であり、相対的な情報の重要度が低い、「は」を用いた表現では、主題となり、トラジェクターになったため、主題化された要素の情報の重要度が「元に想定する形」より相対的に上昇していることになり、これは「強調」の生起条件を満たしていることになる。この型は前節で述べた、『強調』の生起基準のスキーム」のうち、[b]に該当する。

5.1.4 被修飾語の主題化型：「辞書は新しいのが良い。」

本項では、被修飾語の主題化型の例文について、本稿で提唱する助詞「は」の「強調」の定義にどのように該当するかを「辞書は新しいのが良い。」の例文を用いて述べる。

この例文の「元に想定する形」は、「新しい辞書が良い。」である。この例文の「強調」は、「辞書」にも「新しい」にも影響していると考えられる。本稿の主な議論は、「強調」が「主題」を内包するかであるため、まずは、主題化している「辞書」に注目する。「辞書」を主題化することで、ほかの文具や書物よりも、とりわけ、「辞書」については、新品がよいと考えていることがわかる。しかしながら、「元に想定する形」でも、文の中心の主語で、かつ、トラジェクターであり、相対的な情報の重要度が高く、「は」を用いた表現でも、主題となり、トラジェクターのままであるため、主題化された要素の情報の重要度が「元に想定する形」より相対的に上昇しているとはいえない。ただ、一般的な表現である、「新しい辞書が良い。」という「元に想定する形」から、「が」格をあえて「は」を用いた表現に変更し、主題化を生じさせることで、聞き手に想定破棄を起こさせていると考えられる。ここで着目したいのは、「辞書」を強調するだけであれば、「新しい辞書は良い。」という、後述する「補

部（主語）の主題化型」を適用すればよいのにもかかわらず、「新しい」という文要素についても焦点推移が見られることである。

「新しい」に着目すると、「辞書」を主題化することで、「元に想定する形」で主語の連体修飾語であった「新しい」が、「は」を用いた表現では、より重要度が高い文役割の主語となり、「新しい」が「強調」の生起条件を満たしていると言える。「新しい」という文要素を補語やトラジェクターにして焦点推移させるためには、「*新しいのは辞書が良い。」や「*辞書が新しいのが良い。」は成立しないため、「辞書」を主題化せざるを負えない。つまり、この文の「元に想定する形」から「は」を用いた表現で最も強調したいことは「新しい」であり、「辞書」の主題化はそれに付随するものに過ぎないと言える。

この型は前節で述べた、『強調』の生起基準のスキームのうち、「辞書」の文要素は[e]に該当し、「新しい」の文要素は[b]に該当する。

5.1.5 補部（直接目的語）の主題化型：「この水はコンビニで買いました。」

本項では、補部（直接目的語）の主題化型の例文について、本稿で提唱する助詞「は」の「強調」の定義にどのように該当するかを「この水はコンビニで買いました。」の例文を用いて述べる。

この例文の「元に想定する形」は、「コンビニでこの水を買いました。」である。「元に想定する形」では、直接目的語であり、相対的な情報の重要度が低かったが、「は」を用いた表現では、「主題」となり、トラジェクターとなったため、主題化された要素の情報の重要度が「元に想定する形」より相対的に上昇することになり、これは「強調」の生起条件を満たしているといえる。この型は前節で述べた、『強調』の生起基準のスキームのうち、[c]に該当する。

5.2 非焦点推移型

5.2.1 補部（主語）の主題化型：「父はこの本を買ってくれた。」

本項では、補部（主語）の主題化型について、本稿で提唱する助詞「は」の「強調」の定義にどのように該当するかを「父がこの本を買ってくれた。」という例文を用いて述べる。

この例文の「元に想定する形」は、「父がこの本を買ってくれた。」で、ここでのトラジェクターは「父が」であり、「が」格が「は」に変えられ、主題化している。「元に想定する形」と「は」を用いた表現に、トラジェクターの変更はないため、主題化された要素の情報の重要度が「元に想定する形」より相対的に上昇しているとはいえない。ただ、本を他者から買ってもらったことを紹介する場合、一般的に、「Aさんが（私に）この本を買ってくれた。」が「元に想定する形」となるが、この「元に想定する形」に文意も焦点化の優先順位も変えないまま、「が」格をあえて「は」を用いた表現に変更し、主題化を生じさせることで、聞き手に想定破棄を起こさせている。この型は前節で述べた、『強調』の生起基準のスキームのうち、[e]に該当する。

5.2.2 程度の増減型：「500 円はかかる。」「500 円はかからない。」

本項では、程度の増減型の例文について、本稿で提唱する助詞「は」の「強調」の定義にどのように該当するかを「500 円はかかる。」、「500 円はかからない。」の例文を用いて述べる。

この例文は、費用の程度を示しているが、これらは、「主題」にも、「対比」にもならない例文と見なすことができる。この2つの例文の「元に想定する形」は、「500 円がかかる。」である。「500 円はかからない。」の元の形は「500 円がかからない。」のように考えられる

が、この場合、「元に想定する形」が「500 円を（すべて）支払う必要がない。」という文意になり、「約 500 円を支払う必要がある。」という文意を持つ「は」を用いた表現と文意が大きく変更されてしまうため、「約 500 円を支払う必要がある。」と文意が大きく変更されない「500 円がかかる。」を「元に想定する形」とする。

この 2 つの例文は、どちらも「約 500 円を支払う必要がある。」という文意は変わらないものの、「500 円がかかる。」という例文では、購買対象に少なくとも「500 円」を支払う必要があることを示しており、500 円以上を支払う可能性を示唆している。一方で、「500 円はかからない。」という例文では、購買対象に最大「500 円」を支払う必要があることを示しており、500 円未満を支払うということを示唆している。これらの「元に想定する形」と「は」を用いた表現の 2 つの例文の費用の程度については、図 6 のようにまとめられる。「元に想定する形」でも、「は」を用いた 2 つの例文でも、「約 500 円を支払う必要がある。」という文意は変わらないが、「は」を用いることで、費用を「500 円」から「約 500 円」と程度に幅を持たせることができる。この程度の幅が 500 円以上か、それ未満かは、述部が定める。

つまり、「は」が使用されることによって、「は」の前につく費用に幅を持たせることができる。費用の幅の程度は、引き上げたり、引き下げたりすることができ、「元に想定する形」では考慮されない、費用の程度の幅の情報の重要性を高めている（＝強調している）と考えられる。つまり、この用例は、「主題」や「対比」の意味を持つとはいえないが、「強調」の基準は満たしている。この型は、前節で述べた『『強調』の生起基準のスキーム』のうち、[f]に該当する。

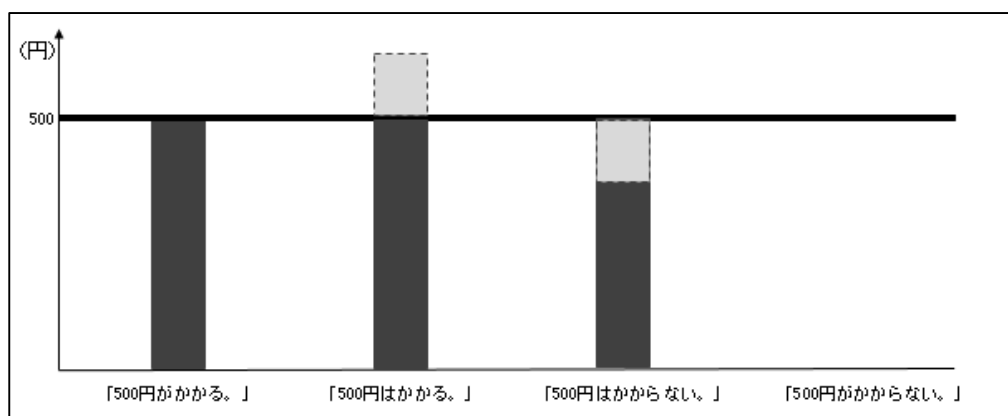


図 6 「元に想定する形」と程度の増減型の費用の程度

以上の議論をまとめると、この例文のような用例は、「主題」にも、「対比」にも当てはまらないものであるにもかかわらず、「強調」が発生しているという事実は、「強調」の生起条件を満たす別枠の「強調」が存在していることを示唆している。ここで注目すべきことは、「主題」と「対比」の意味項目を包括する上位意味項目としての「強調」の存在と、従来の「主題」や「対比」とは異なりながらも、「強調」の生起条件を満たす別枠の「強調」の存在が混在していることである。用語上の混在が「は」の全体像の理解を複雑にさせる可能性があるため、「主題」と「対比」の意味項目を包括する上位意味項目としての「強調」の存在を、新しい用語として次節で提案する。

6. おわりに

本稿では、「強調」の生起条件を関連性理論や認知言語学の知見を用いて整理し、その生起条件が「主題」を内包するのかどうかを明らかにすることを目指した。

まず、議論の端緒として、現在までの助詞「は」の意味項目の議論での「強調」の意味項目の定義の揺れと談話に関する生起条件についての言及の欠落を指摘した。この問題に対し、関連性理論や認知言語学の知見を用いて、談話における「強調」の生起条件を設定した。そして、ここで整理した「強調」の生起条件を用いて、先行研究で取り上げられていた例文を中心に用例を再検討した。

研究課題に関してまとめると、まず、「RQ1：強調の定義（生起条件）は何か。」については、推論 H_{n-1} ②と発話 n に言語表現上の差異が生じる（＝想定破棄が生じる）ことを指摘した。基本的に助詞「は」は、焦点推移を引き起こし、ある要素の文役割が、「元に想定する形」から推移している場合、その要素が「強調」されたとみなす。また、焦点推移が発生せずとも、「元に想定する形」から表現が変化したことにより、「元に想定する形」と差異が発生し、想定破棄が起こり、焦点推移による「強調」よりは程度が低くなるが、「強調」の意味が発生しているとした。次に、「RQ2：助詞「は」のどの用例が、強調の生起条件に該当しているのか。」については、現時点では、用例を大きく焦点推移型と非焦点推移型の2つに大別した。焦点推移型には、付加部の主題化型、修飾句（格成分の連体修飾語）の主題化型、修飾句（述語名詞の連体修飾語）の主題化型、被修飾語の主題化型、補部（目的語）の主題化型の5つがあり、非焦点推移型には、補部（主語）の主題化型と程度の増減型の2つがあるとした。最後に、「RQ3：助詞「は」の意味上位項目はどのように設定できるか。（「主題、強調」か「強調」か。）」については、当初、図1を仮定していたが、程度の増減型に鑑みると、この型は、『主題』と『対比』どちらも内包しないが、『強調』の生起条件を満たすものであるとして、「強調」にのみ包含される可能性を指摘した。そのため、図7に示すように、関連性理論や認知言語学の知見を援用して、「主題」と「対比」、「強調」を並置し、「強調」が果たす機能をより高次に引き上げ、これら3つをすべて内包する最適解の上位意味項目として、用語の混同を避けるためにも、「引き立て」という新しい用語を提案する。

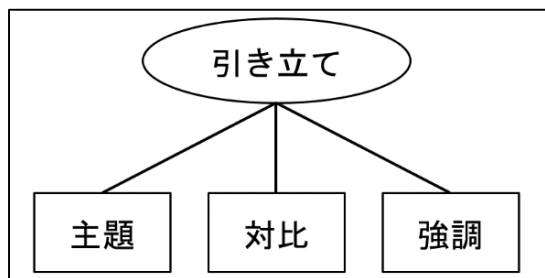


図7 新しい「は」の意味項目の全体図

すでに見たように、形式の対象を「名詞句＋『は』」以外、つまり、前に名詞句以外の品詞（句）が接続する場合にも広げると、例えば、程度の増減型の用例のように、「主題」にも、「対比」にも当てはまらない用例があることが確認できることは、本論で主張してきた、「強調」が一律的に「主題」や「対比」を包含するという主張の反例にもなりうるものである。ただ、「想定破棄」という枠組みで、「強調」を再検討し、より高次の意味項目として「引き立て」という上位意味項目を設定することで、助詞「は」の意味項目の再編が成立した。

最後に、今後の課題として、本稿で一部取り扱った「名詞句＋『は』」の形式以外にも注目して、本稿で提唱した新しい「強調」（＝引き立て）の生起条件が当てはまるかどうかを検証し、助詞「は」における意味構造の解明とその精緻化を図る必要がある。

文 献

- Grice, Paul (1989) *Studies in the Way of Words*, Harvard University Press.
- 林史典・林義雄・金子守 (編) (2020) 『学研現代新国語辞典 第四版』Gakken.
- 林宅男 (2019) 「認知談話研究」辻幸夫 (編) 『認知言語学大辞典』朝倉書店, pp.583-597.
- 林宅男 (2023) 『認知語用論』の理論的基盤とその方向性『桃山学院大学総合研究所紀要』34号, pp.63-83.
- 井原彩樺 (2026) 「国語教育における助詞「は」の意味分類と教授法に関する再検討—自立語が前接続する助詞「は」に着目して—」卒業論文 (未発表原稿) .
- 今井邦彦 (2001) 『語用論への招待』大修館書店.
- 市川孝・見坊豪紀・金田弘・進藤咲子・西尾寅弥 (編) (2004) 『三省堂現代新国語辞典 第二版』三省堂.
- 菊地康人 (1995) 『「は」構文の概観』益岡隆志・野田尚史・沼田善子 (編) 『日本語の主題と取り立て』くろしお出版, pp.37-70.
- 金田一京助・佐伯梅友・大石初太郎・野村雅昭 (編) (1994) 『新選国語辞典 第七版』小学館.
- 北原保雄 (1981) 『日本語の世界 6 日本語の文法』中央公論社.
- 北原保雄 (編) (2010) 『明鏡国語辞典 第二版』大修館.
- ことばと意味の研究会 (2018) 『ことばを理解するしくみ—関係性理論で学ぶ意味の世界—』Design Egg.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版.
- 松井智子 (2003) 「関連性理論：認知語用論の射程」『人工知能』18:5, pp.592-602.
- 松村明 (1995a) 『大辞林第二版 上巻 あーす』小学館.
- 松村明 (1995b) 『大辞林第二版 下巻 せーん』小学館.
- 松村明 (編) (2006) 『大辞林第三版』三省堂.
- 松村明・山口明穂・和田利政 (編) (1998) 『旺文社国語辞典 第九版』旺文社.
- 三上節 (1969) 『象は鼻が長い：日本文法入門』くろしお出版.
- 森岡健二・徳川宗賢・川端善明・中村明・星野晃一 (編) (1993) 『集英社国語辞典 第二版』集英社.
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静雄・柏野和佳子・星野和子・丸山直子 (編) (2019) 『岩波 国語辞典 第八版』岩波書店.
- 野田尚史 (1996) 『新日本語文法選書 1 「は」と「が」』くろしお出版.
- 尾上圭介 (1981) 『「は」の係助詞性と表現的機能』『国語と国文学』58:5, pp.102-118.
- ラネカー、ロナウド・W. 山梨正明 (監訳) (2011) 『認知文法論序説』研究社.
- 阪倉篤義・林大 (編) (1966) 『講談社国語辞典 第二版』講談社.
- Shibatani, Masayoshi (1990) *The Language of Japan*. Cambridge University Press.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1997) *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell.
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンクスと意味 第三卷』くろしお出版.
- 山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之 (1972) 『新明解国語辞典 第七版』三省堂.
- 山梨正明 (2004) 『ことばの認知空間』開拓社.
- 山下杉雄・村上公雄・塩谷善之・大西匡輔 (1998) 『明治書院精選国語辞典 新訂版』明治書院.

関連 URL

国立国語研究所. 2024. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 (バージョン 2021.03, 中納言バージョン 2.7.2) .<https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/> (2024 年 12 月 24 日確認) .